はじめに

本報告書は愛知大学国際中国学研究センター（COE-ICCS）のうち、中国の人口と生態環境問題グループが 2006 年６月３日に愛知大学車道校舎で実施した『中国の砂漠と砂漠化をめぐって』のシンポジウムを中心とした記録集である。

2006 年は沙漠と沙漠化の世界年にあたり、ICCS の環境グループとしてこの沙漠と沙漠化問題を取り上げるにはふさわしいテーマとなった。沙漠と沙漠化を国際年とするほど今日の世界における沙漠の拡大には著しいものがある。そして、日本のように沙漠をもたない国にとっても沙漠化にともなう影響は間接的どころかより直接的でさえあるようになった。というのも、近年、そのあらわれ方が目立つようになった黄砂の「来襲」が繰り返すようになったからである。かっては春先に数日、春の風物誌的存在であった黄砂は、今や 20 日も超えるようになり、その密度も高くなってくると、洗濯物の汚れが目立ち、より細かな浮遊塵であることから、目や呼吸器にとっての不安もよぎるようになってくる。

2006 年 4 月上旬には名古屋地方もひどい黄砂現象に包まれたが、ちょうどその時、筆者は内モンゴルの包頭からその南方のオルドス沙漠にいた。小嵐のように風が吹き、そのたびに沙漠や近くの畑から土埃が舞い上がった。北京へ向かう飛行機も黄砂の中を飛んだし、着いた北京では自動車が白黄色の土に覆われ、天安門広場では広場の反対側の建物がよく分からないほどであった。この時、この黄砂は東シナ海を越え、日本、そして名古屋にまで続いていたのである。

黄砂は沙漠化の副産物である。そしてここ数年、日本までその影響を直接受けるようになった理由はまぎれもなく人間活動のなせるワザである。中国の場合、急速な経済発展は食生活を変え、肉食が普及するとともに内モンゴルのような草原に家畜の飼育者が増え、それが草地を荒廃させ、沙漠化につながるような動きをもたらしたのである。その凄まじさの中で「生態移民」さえ行なわれるようになったほどである。

つまり、今日、世界的に同時進行的沙漠化はもっぱら人為的理由によるものである。しかし、従来の沙漠化やダストの研究は自然科学の手になるものばかりであり、またそのような研究に助成金が投入されてきた。それなのに、ひとたび現地を歩けば、無原則な土地利用や水利用、社会組織の変化などが沙漠化を支えていることはすぐにわかる。その点、沙漠化の人文・社会的アプローチがもっと必要である。

そのような主旨を踏まえ、このシンポジウムでは従来からの自然的視点に、人文・社会的視点からのアプローチ、さらに新たな計測技術の発展をベースにしたアプローチを加え、最後には緑化をすすめる修復運動のアプローチも加え、沙漠および沙漠化問題の立体的、複合的理解をめざそうとした。当日の会場には千葉大石山先生がご提供下さった沙漠の衛星写真が雰囲気を盛り上げてくれ、多くの参加者と多くの人の発言をいただいた。主催者としてはこれ以上幸せなことはなかったことを記し、発表者、参加者そして裏方の方々のご協力にあらためてお礼申し上げる。

愛知大学国際中国学研究センター(ICCS)
事業推進委員・本シンポジウム責任者
藤田 佳久

※ 本報告書では、図表、写真をすべてモノクロで掲載していますが、ICCS ホームページ上ではカラーで閲覧いただけます。 http://leo.aichi-u.ac.jp/~iccs/